

遠隔授業に対する学生の意識に関する一考察

荒木麻耶¹ 山岡俊樹²

A Study on Students Awareness Towards Remote Learning

Maya Araki Toshiki Yamaoka

In this study, we conducted a questionnaire survey on awareness towards remote learning on female university students. As a result, based on the 5-point evaluation, individual differences were seen on three items: no stress, no content in mind, and easy to talk. In addition, there were also free-form answers such as merits, demerits, and countermeasures against the disadvantages of remote learning. The advantages of remote learning are unnecessary traveling, asking questions without difficulties, and attending classes from the comfort of home. On the other hand, there are disadvantages such as lack of communication, network hindrance, and concentration problems throughout the learning. To prevent the above, we found out that it is better to use breakout rooms, chat functions, and reaction buttons during lessons, and communications between students as well as between students and teachers are also needed.

1. 緒言

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的な拡大により、大学での授業は例年と異なり、面接授業（対面での授業）から遠隔授業（Zoom等を活用したオンライン授業）の実施を余儀なくされている。文部科学省においても「各大学等が学生に寄り添い、例年と異なる環境の中でも、学生が安心し、また十分納得した形で学修できるような対応を講じていただくことが重要¹⁾」と周知しており、状況に応じた面接授業と遠隔授業の実施が求められている。そこで本稿では、遠隔授業に対する学生の意識調査を行い、要求事項の考察を行う。

2. 研究方法

本研究では、本学女子大学生 41 名に協力してもらい、アンケート調査を実施した。アンケートは Google フォームを採用し、実験協力者各自の

スマートフォンやノートパソコンといった情報端末デバイスから回答を得た。

アンケート項目は、全 13 問とし、設問 1～10 は 5 段階評価（必須回答）とし、「緊張感がない、雑談ができない、対面のようなリアリティがない、気楽である、移動せずに済む、ストレスがない、雰囲気・空気感が伝わらない、内容が頭に入っていない、話が盛り上がらない、話しやすい」の項目を設定した。設問 11～13 は自由記述（任意回答）とし、オンラインのメリット、デメリット、デメリットに対する対応策について質問した。

5 段階評価の尺度は、「5. とても当てはまる、4. やや当てはまる、3. どちらでもない、2. あまり当てはまらない、1. 全く当てはまらない」とした。

3. 結果・考察

3.1. 集計結果

10 問の設問項目と 5 段階評価の結果を示す（表 1、図 1）。

¹ 本学大学院家政学研究科生活環境学専攻博士後期課程

² 本学教授

表1 設問項目と結果一覧

尺度 項目	5.とても 当てはまる	4.やや 当てはまる	3.どちら でもない	2.あまり 当てはまらない	1.全く 当てはまらない
1.緊張感がない	17% (7)	63% (26)	10% (4)	10% (4)	0% (0)
2.雑談ができない	51% (21)	32% (13)	7% (3)	10% (4)	0% (0)
3.対面のようなリアリティがない	34% (14)	51% (21)	8% (3)	7% (3)	0% (0)
4.気楽である	32% (13)	54% (22)	7% (3)	7% (3)	0% (0)
5.移動せずにすむ	93% (38)	7% (3)	0% (0)	0% (0)	0% (0)
6.ストレスがない	5% (2)	36% (15)	27% (11)	22% (9)	10% (4)
7.雰囲気・空気感が伝わらない	32% (13)	41% (17)	12% (5)	15% (6)	0% (0)
8.内容が頭に入っていない	17% (7)	34% (14)	19% (8)	20% (8)	10% (4)
9.話が盛り上がらない	20% (8)	51% (21)	27% (11)	2% (1)	0% (0)
10.話しやすい	3% (1)	12% (5)	22% (9)	34% (14)	29% (12)

割合(人数) ※最頻値は太字

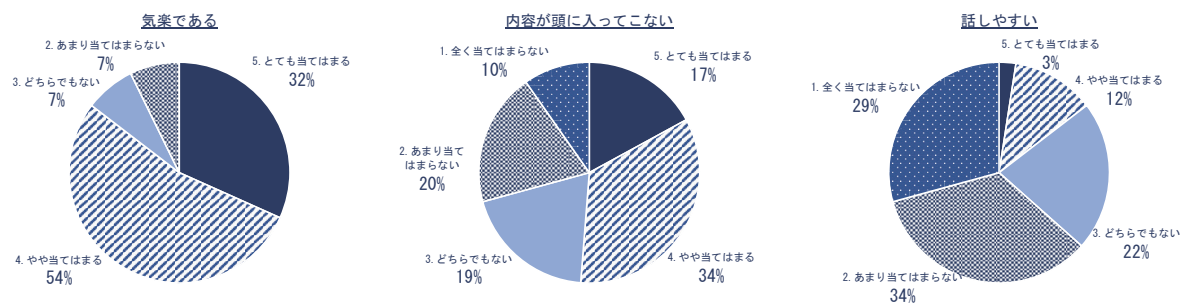


図1 5段階評価の結果(一部)

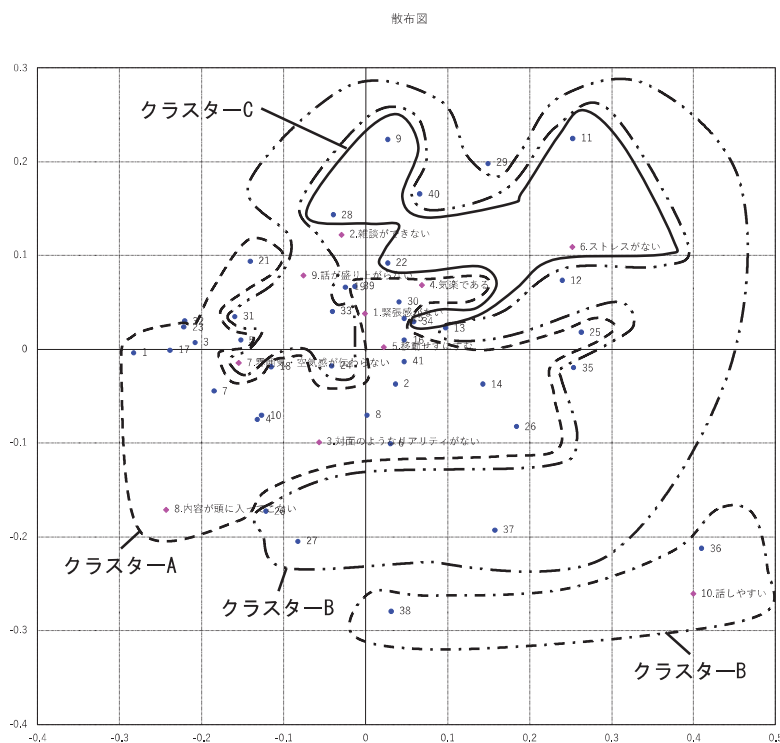


図2 コレスポネンス分析+クラスター分析

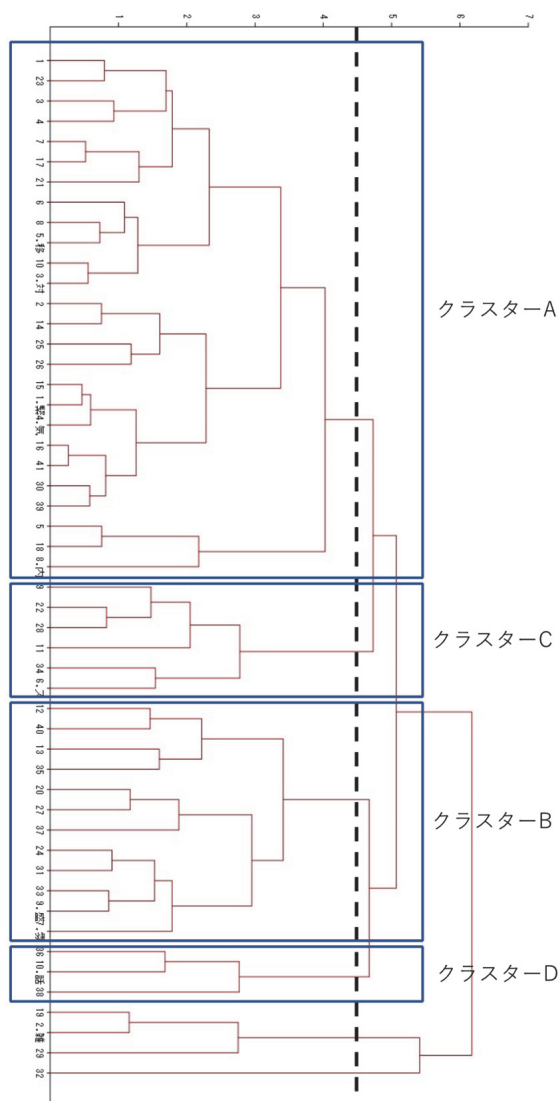


図3 クラスター分析による分類

「緊張感がない、雑談ができない、対面のようなリアリティがない、気楽である、移動せずにすむ」の5項目では、とても当てはまる、やや当てはまるが8割以上を占めた。

「ストレスがない、内容が頭に入ってこない、話しやすい」の3項目では回答にばらつきがあり、個人差があると考えられる。

3.2. コレスポネンス分析の結果

実験協力者41名の設問に対する5段階評価を元に、コレスポネンス分析を行った。さらにコレスポネンス分析で得られた結果から、クラスター分析を行い、6つのクラスターに分類した。6つのクラスターの中で人数が3名以上属する3つのクラスター（A・B・C）だけ、線で囲み、

図に示した（図2・3）。

クラスターAは21名が属し、「緊張感がない、対面のようなリアリティがない、気楽である、移動せずにすむ、内容が頭に入ってこない」の5項目との関連が高かった。

クラスターBは10名が属し、「雰囲気・空気感が伝わらない、話が盛り上がらない」の2項目との関連が高かった。

クラスターCは5名が属し、「ストレスがない」との関連性が見られた。3.1.でも述べた通り、「ストレスがない」の項目では回答結果にばらつきが見られたが、クラスターCの全員がとても当てはまる、やや当てはまると回答し、遠隔授業に対するストレスをさほど感じていないと読み取ることができた。

クラスターDは2名が属し、「話しやすい」との項目と関連があった。ストレスがないの項目と同様に、「話しやすい」は回答に個人差が見られたが、2名とも概ね話しやすいと回答していた。

3.3. 自由記述に対する分析

(1) 親和図法による分類

自由記述の3項目では任意での回答とし、メリットとデメリットに対する対策では39名、デメリットでは40名から回答を得ることができた。項目ごとに親和図法を用いて分類した。

①オンラインのメリット

オンラインのメリットは、移動時間が不要であること、時間の有効活用ができること、場所を選ばずに受講できること、気軽に質問できること、リラックスできること、出席しやすい等に分類した。

出席しやすい背景には、電車の遅延などによる影響を受けづらいことや体調が優れない際にも周りの目を気にすることなく、自身のペースで参加できることが考えられる。

さらに、自宅は慣れ親しんだ環境であるため、気負いすることなく受講できると示唆する。

②オンラインのデメリット

オンラインのデメリットは、コミュニケーションの取りづらいこと、不安定なネットワークによる妨げられること、集中しづらいこと、発言がし

づらいこと、課題の負担増加等に分類した。

コミュニケーションの取りづらさは、学生間と学生と教員間の2つの視点で捉えることができる。対面での授業と比較すると、遠隔授業では教員の発言中の学生間での対話は難しく、授業妨害に繋がりがやすい。そのため、授業中の学生間の教え合いなども行いづらく、コミュニケーションを取りづらいつ感じているのではないかと考える。

遠隔での授業中の発言は、発言者に画面が遷移するため、受講者全員からの注目を浴びやすい。そのため、発言に対するハードルが高くなり、講義内での教員とのやりとりが難しくなっているのではないだろうか。また、講義前後の時間を利用し、大勢の前での発言を避け、教員と1対1での質疑や相談ができていたはずであるが、それも難しい状況にある。授業外でのメールでの対応を行う教員も見られ、門戸を広げた手厚いサポートも行っているものの、メールを送る行為自体が学生にとって大きなハードルにならざるを得ない。

また、集中のしづらさ、緊張感の無さ、気の緩み、やる気の出にくさ、気持ちの切り替えの難しさなどは集中しづらいに集約したが、オンライン授業でのモチベーションの維持は大きな課題である。オンライン授業時のネットワーク回線への負担を考慮し、受講者全員がビデオをオンにした状態で授業を受ける機会も少ないためか、周りの目がなく、真面目に受けていてもそうでなくても、他人からは評価されにくい。対面での授業よりも学生自身の自己管理能力や自己統制力が求められていると推察する。

③オンラインのデメリットに対する対策

オンラインのデメリットに対する対策は、コミュニケーションの取りづらさからブレイクアウトルームの利用、集中しづらさからこまめな休憩の実施、リアクションボタンの活用、不安定なネットワークによる妨げから安定したネットワークの用意などに分類した。

ブレイクアウトルームやチャット機能の活用は、学生間のコミュニケーションの場の提供につながり、授業の活性化にも繋がられるのではないかと

予測する。また、少数意見ではあるが、個人ごとの課題ではなく、グループでの課題を設けることが挙げられた。グループ課題は、学生間のコミュニケーションを取るきっかけになり、対人関係の構築の手助けとなりうる。

また、授業内でのこまめな休憩が挙げられたが、教員側からの一方的講義や人目がない中での実習授業への90分間の集中が難しいのではないかと推測する。そのため、ブレイクアウトルームの活用による意見交換、チャット機能を活用した双方向的意見交換の時間を設けることは、学生の授業に対する集中力継続への加勢になるのではないだろうか。チャット機能やリアクションボタンの活用は学生だけでなく、教員にとっても学生の理解度を測ったり、緊張感を持たせたりするためのツールにもなりうる。

(2) KH Coderによる分類

自由記述の3項目をそれぞれKH Coderを用いて、共起ネットワーク図にて分類した(図4、5、6)。

メリットは大きく8つに分類され、時間と移動が強く結びつき、記述頻度が高いことが窺える。

デメリットでは、「授業・内容・頭・入る・緊張・集中」、「友達・意見・交換」などの6つのグループの結びつきが分かった。授業が最も大きいことから、集中できない、緊張しないなどの声が多数上がっていたと読み取れた。

デメリットに対する対応では、「定期・ブレイクアウトルーム」、「チャット、機能、使用、トラブル」など6つのグループのつながりが判明した。デメリットでは授業に集中しづらいなどの声が多く、それに対する対応策として、時間・休憩や授業・少人数が多く頻出し、繋がりが見てとれた。

(3) 親和図法とKH Coderによる分類の比較

筆者による親和図法を用いた分類と、KH Coderによる分類では大きな差は見られなかった。

本稿では、親和図法の分析を発言の数が多かった記述を優先させたため、少数意見を紹介しきれなかったが、共起ネットワーク図で少数意見も確認できた。

